

文副詞的機能を担う名詞の史的発達と文法化の方向性について —「事実」と「問題」を中心に—

柴崎礼士郎（明治大学）

キーワード：発話周辺、投射構文、(抽象)名詞、コーパス、一方向性

本発表では名詞「事実」および「問題」の文副詞的機能を歴史的に考察する。(1)に示すように、

「事実」は名詞として用いられていたが、現代の日本語では(2)のように副詞的機能を果たす場合も多い。(1)は名詞として、(2)は副詞としての初出例であり、考察点には下線を施してある。尚、紙幅の都合で例文は「事実」のみ提示する。

(1) 摂政被来云、今夜齊院盗人入云々、仍奉遣奉云々、右大弁来云、齊院事実也。

(寛仁元年(1017)七月二日『御堂関白記』; 北原・他(2006))

(2) 兄さんは誰よりも今の若い人達の心をよく知ってゐる。そして事実、東京で若い多くの女の子のお友達もおありの事であつたらうし。(1914『田舎医師の子』<相馬泰三>五; 北原・他(2006))

(1)では「事実なり」のように動詞の一部として使用されているが、(2)では接続詞を伴った形で文副詞的機能を果たしている。「問題」も同様の変化を遂げている(...問題許すなり[1104]>問題は[1915-30])。これら以外にも指示詞や節を伴う用法もあるが、「事実」は提題助詞なども伴わない独立用法を特に発達させている。例えば、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の書籍ジャンルでは、文頭に現れる事例は7例(1970年代)、71例(1980年代)、249例(1990年代)、466例(2000年代)と増加傾向にある。提題助詞を伴う「問題は」の場合も、8例(1970年代)、59例(1980年代)、212例(1990年代)、602例(2000年代)と同じく増加しており、文副詞的機能の広まりを確認できる。

統語的には、動詞の一部という発話の右周辺部から、情報導入機能(相互行為言語学でいう「投射構文」機能)を担う文頭という発話の左周辺部へ位置を変化させている。機能変化に伴う統語位置の変化は近年注目を集めており(e.g. 東泉・高橋 2013; Beeching, K. & Detges 2014)。「事実」と「問題」も一事例と判断できる。漢字文化圏の一部である中国語でも同様の機能が確認でき、例えば、日本語の「問題は、時間が無いことです」は中国語で「问题是没有时间」となり、文頭に位置する情報導入機能を果たしている。興味深いのは、英語やドイツ語などの西欧語でも(抽象)名詞を文頭・節頭に用いる構文が発達している点である(*(the) problem is (that)...*, *das Problem ist, (dass)...* 'the problem is that')。恐らく、発話の周辺部は話者スタンスが生起しやすく、類型論的に異なる構造の言語にも類似の機能を担う構文が発達する可能性は否めない。

参考文献

Beeching, K. & Detges, U. eds. (2014) *Discourse functions at the left and right periphery*. Leiden: Brill. 東泉裕子・高橋圭子(2013)「「結果、こういうことが言えそうです。」～コーパスにみる名詞の文副詞的用法～」『第3回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, pp.91-96. 国立国語研究所.

北原保雄・他(編)(2006)『日本国語大辞典』第二版, 東京: 小学館. 国立国語研究所. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 高橋圭子・東泉裕子(2014)「近代語コーパスにみる「結果」の用法」『第6回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, pp.103-112. 国立国語研究所.